



# 中高生とともに差別と闘う

## 『夫人の仕事』

吉成タダシ (うずしおランチ代表)



### 母の苦悩、家族の苦悩

前号の続きです。

ダウン症の弟を、「天使」と笑顔で紹介した女の子。障がいのある友達の家が抱える、成人式に対する胸の内を知り、社会に在る差別意識に苦悩します。同時に、決してシャットアウトしないこと、いろんな面を見ることを、会場全体にしんみりと語りかけます。

それにまた別の中学生が応えました。

「障がい者についてなんですけど。」

ボクも兄が発達障がい。今、家で父さんとお母さんが兄の発達障がいのことで、検査に行くか行かないかでけんかしちゃってるんです。お父さんの一言が、お母さんには衝撃だったらしいんですよ。

今月の二週目の金曜日なんですけど、突然お母さんがボクの部屋に来て、泣きながらこんなことを言ってます。すべて聞かされた時にボクも涙目になっちゃって。

ボクの兄が発達障がいだと言われたらしいんですけど、一見すると何も変わらないし、普通の男の子に見えるんです。それでお父さんに、「自分の子どもは障がい者だ」みたいに言われたみたいで、お母さんもすごく傷ついたらしくて。自分も信じられなくて。

もともとうちは三人兄弟だったはずなんです。お腹の中で一人死んじゃったみたいで、子どものことでお母さんはすごく頭を抱えちゃった

らしくて。それで思いを全部ボクにぶつけてきたんで、ボクもちよっと泣いちゃって。今は笑えるんですけど、ホントはそんなに笑って言えることではないんですけど。

障がい者って、ボクは言いたくないんですよ。正直言ってこの差別的な用語をなくしたいんです。定着しちゃったからなくならない訳で、これからボクもそんなこと言いたくないんで、もう言わないですけど。

一度お母さんが一日中泣いていたことがあったんで、その時にずっとそばにいたボクも辛かったです。

途切れ途切れに語られる彼の思いは決して雄弁ではなく、腹の底にある断片を吐き出すかのようでした。それでも、確かな思いはちゃんと伝わってきて、でもそれは整理されず、聴く私たちに流れ込んでくるようでした。

### 当事者の声

そんな語り合いを続けてきた集会の終盤、まさに終わろうかというとき、また別の中学生が手を挙げ発言しました。

「ボクは、目に見えない障がいや病気とか知的障がいがあるって分かったうえで、それに対応していくことが今は求められていると思います。」

実際自分も発達障がいです。それで、学校とかでたまに発達障がいのことを話そうかと思うことがあるんですが、なかなか話す気にはなれません。たまにミスをしたりすること

があったり人に迷惑をかけるのは、そのせいで誤解ではないんですけど、それが原因、脳の機能の障がいのものが原因で。記憶が苦手だとか言いたいんですけど、なかなか言えるような関係をつくるのが難しくって。

それで、どのようにしていけば、これから誰もが住みやすく、発達障がいの人も働きやすい環境がつかれるか。それが、今後の鍵となっていくわけで、もしそれができれば発達障がいである自分にとっては、とても嬉しい社会だと思います。以上です」

この発言を聞いたとき、「障がいって何だろう」と、今さらながら宙を見あげてしまいました。これまで多くの人が、「障がい」と一括りにして見てきたイメージと、彼のようにちゃんと自己を分析しつつ、かつ周囲から向けられる視線を感じながらもそれに抗おうとする精神性。そして、あるべき人間社会の有り様を問う姿を目の前にしたとき、私自身の中にある差別意識が打ちのめされたような気がしました。

### 大人の仕事

中学生集会では、できるだけ大人は口を挟みません。言いたいことは山ほどあって、それが溢れ出してしまふこともあるのですが、それでも基本的に子どもたちの発言を中心に展開していきます。

それに、このような流れで切々と中学生に語られると、大人の説教じ

みた話なんて、どこかに吹き飛んでしまします。意味がなくなりまして。もう大人なんて、教師なんて、ダメです。ごめんなさい、と言うより他ありません。

中学生の語り合いは、教師がシナリオを用意して、綺麗に流していくような人権学習ではありません。でも、人権学習とはそもそもそんなものだと思います。あつちに行ったりこつちに行ったり、行ったりは戻り、戻っては進み、分からなくなることでも当たり前。泥まみれになることだってある。決してスマートじゃないけど、それでも自分なりの、自分たちの答えをさがしながら見つけ出していく。それが、人権学習の良さであり、面白さでないかと思うのです。与えられたものでは真の成長にはつながりません。やはり、自ら答えを見つけ出すことなのです。きつと大人の仕事は、子どもを信じ抜き、じつと我慢強く見守り続けることなのです。大人がしゃべりすぎないこと。沈黙を恐れないうこと。沈黙を恐れず、子どもたちが自分を表現することを信じ、グツと我慢して待つこと。それが、大人の仕事なのではないかと思えます。

そんな中学生集会。今年は新型コロナの影響もあり開催が危ぶまれましたが、十月十八日に延期のうえ、規模を制限して実施することとなりました。今年はどうな語り合いとなるのか、楽しみです。